

第 2 回対象火気設備等技術基準検討部会議事概要

1 日時及び場所

平成27年3月4日（水）14時～ 主婦会館プラザエフ 4階シャトレ

2 出席者

部会長	小林 恭一	東京理科大学大学院 国際火災科学研究科 教授
委員	植田 利久	慶應義塾大学工学部 機械工学科 教授
委員	加藤 晃一	東京消防庁 予防部参事兼予防課長
委員	金村 聖志	首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 都市環境科学環・分子応用化学域 教授
委員	佐々木定雄	一般社団法人 日本ガス石油機器工業会
委員	七條 勇佑	千葉市消防局 予防部指導課長
委員	田中 智	一般社団法人 日本電機工業会 家電部長
委員	松本 孝直	一般社団法人 電池工業会 次世代蓄電池担当部長
委員	山田 常圭	消防研究センター研究統括官
事務局	消防庁予防課	

(大宮委員は欠席)

3 配布資料等

<資料>

資料 2 - 1	第 1 回対象火気設備等技術基準検討部会議事概要
資料 2 - 2	蓄電池設備に係る検証実験
資料 2 - 3	ガスグリドル付こんろに係る検証実験
資料 2 - 4	IH調理器（グリルとの複合品含む）に係る検証実験
資料 2 - 5	対象火気設備等技術基準検討部会報告書骨子（案）

<参考資料>

参考資料 2 - 1	蓄電池設備に係る検証実験データ
参考資料 2 - 2	ガスグリドル付こんろに係る検証実験データ
参考資料 2 - 3	IH調理器（グリルとの複合品含む）に係る検証実験データ

参考資料 2-4 消防関係法令による蓄電池設備に係る規制（概要）

4 議事概要

(1) 開会

(2) 前回議事概要について

資料 2-1 第 1 回対象火気設備等技術基準検討部会議事概要に基づき、事務局より説明を行う。

特段、意見等なし。

(3) 検証実験結果について

資料 2-2 蓄電池設備に係る検証実験、

資料 2-3 ガスグリドル付こんろに係る検証実験、

資料 2-4 IH調理器（グリルとの複合品含む）に係る検証実験、
に基づき、事務局より説明を行う。

(4) 検討部会報告書骨子（案）について

資料 2-5 対象火気設備等技術基準検討部会報告書骨子（案）に基づき、事務局より説明を行う。

(5) 質疑（○委員、●事務局）

- 今回の鉛蓄電池の燃焼実験では、電極間のショートを保護する電池のカバーに着火した。カバーが燃え、隣のカバーに燃え移っていった。電槽自体は燃えにくいものであるが、結果的に電槽にも燃えて行った。
- 今回は燃やすことが目的の実験であるので、細い配線を使用している。実際にはあまり起こらないと思うが、一旦、火が出ると延焼していくことも事実である。電槽はABS樹脂なので燃えにくいですが、カバーはポリプロピレンにしていることが問題であると認識した。
- 今回の実験で使ったカバーは、形、寸法の違いはあるが、従来から使用されている材質のものである。

- 過去にも蓄電池設備から出火した事例はある。カバーが燃えるということは確認している。
- 燃焼状況を見たところ、背面の換気口からよく延焼していることから、換気口に防火ダンパー等を設ける等の対策が考えられる。
- 今回の実験は、規制対象のキュービクルではなく、規制対象外の一般的に使われているキュービクルの仕様でおこなったものである。当初の見込みよりもよく燃えたことから、規制対象のキュービクルについても、板厚、防火ダンパーの設置、離隔距離、開口部の制御等について、次年度検討して行かなければならないと思っている。
- 今回の実験で流した600Aの電流が流れることは、用途によってはあり得るが、金属板を使用し、流れても大丈夫な設計にしている。
- 通常ではあり得ない状況を想定した実験の結果を踏まえて次年度検討していく必要があるのか。
- 絶対にあり得ないことではない。安全対策が一つでも外れると、こういう状況もあり得る。又一旦、火が出ると延焼していくことを踏まえて検討が必要である。
- 事故があるとすれば、接続部がゆるみスパークによるものが想定されるが、今回の実験からスパークでは着火しなかったので、故意に着火させないといけなかった。ただ、予想以上に燃えた結果を踏まえれば、検証をしていかなければならない。
- 電池のカバーを難燃化する（ABS樹脂とする）などの電池側で対策を行う手もある。キュービクルに入れないといけなくなるのか、基準について検討が必要である。
- いずれにしても、お互いに相関関係がありそうなので、その辺りを含めて来年度、検討していく必要がある。

(6) その他

- 次回は、3月17日第3回検討部会の開催を予定している。報告書（案）を示す予定。